

評価結果報告書

地域密着型サービスの外部評価項目構成

	項目数
・理念に基づく運営	11
1. 理念の共有	2
2. 地域との支えあい	1
3. 理念を実践するための制度の理解と活用	3
4. 理念を実践するための体制	3
5. 人材の育成と支援	2
・安心と信頼に向けた関係づくりと支援	2
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応	1
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援	1
・その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント	6
1. 一人ひとりの把握	1
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し	2
3. 多機能性を活かした柔軟な支援	1
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働	2
・その人らしい暮らしを続けるための日々の支援	11
1. その人らしい暮らしの支援	9
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり	2
合計	30

事業所番号	3070101518
法人名	社会福祉法人 紀三福社会
事業所名	紀三井寺苑
訪問調査日	平成21年 8月 19日
評価確定日	平成21年 9月 23日
評価機関名	特定非営利活動法人認知症サポートわかやま

○項目番号について

外部評価は30項目です。

「外部」の列にある項目番号は、外部評価の通し番号です。

「自己」の列にある項目番号は、自己評価に該当する番号です。参考にしてください。

番号に網掛けのある項目は、地域密着型サービスを実施する上で重要と思われる重点項目です。この項目は、概要表の「重点項目の取り組み状況」欄に実施状況を集約して記載しています。

○記入方法

[取り組みの事実]

ヒアリングや観察などを通して確認できた事実を客観的に記入しています。

[取り組みを期待したい項目]

確認された事実から、今後、さらに工夫や改善に向けた取り組みを期待したい項目に○をつけています。

[取り組みを期待したい内容]

「取り組みを期待したい項目」で○をつけた項目について、具体的な改善課題や取り組みが期待される内容を記入しています。

○用語の説明

家族等 = 家族、家族に代わる本人をよく知る人、成年後見人などを含みます。

家 族 = 家族に限定しています。

運営者 = 事業所の経営・運営の実際の決定権を持つ、管理者より上位の役職者（経営者と同義）を指します。経営者が管理者をかねる場合は、その人を指します。

職員 = 管理者および常勤職員、非常勤職員、パート等事業所で実務につくすべての人を含みます。

チーム = 管理者・職員はもとより、家族等、かかりつけ医、包括支援センターの職員等、事業所以外のメンバーも含めて利用者を支えている関係者を含みます。

1. 評価結果概要表

【評価実施概要】

事業所番号	3070101518		
法人名	社会福祉法人 紀三福祉会		
事業所名	紀三井寺苑		
所在地	和歌山市紀三井寺617-3 (電 話)073-445-7578		
評価機関名	特定非営利活動法人 認知症サポートわかやま		
所在地	和歌山市四番丁52 ハラダビル2階		
訪問調査日	平成21年8月19日	評価確定日	平成21年9月23日

【情報提供票より】(平成21年7月17日事業所記入)

(1)組織概要

開設年月日	平成12年5月1日		
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計	9 人
職員数	8 人	常勤	6人, 非常勤 2人, 常勤換算 7人

(2)建物概要

建物構造	鉄骨平屋造り		
	1 階建ての	階 ~	1階部分

(3)利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	30,000 円	その他の経費(月額)	1,000 円
敷 金	有(100,000円)		
保証金の有無 (入居一時金含む)	無	有りの場合 償却の有無	有 / 無
食材料費	朝食	円	昼食 円
	夕食	円	おやつ 円
	または1日当たり 780円		

(4)利用者の概要(平成21年 7月17日現在)

利用者人数		9 名	男性	2 名	女性	7 名
要介護1			名	要介護2		名
要介護3		4	名	要介護4	2	名
要介護5		3	名	要支援2		名
年齢	平均	78.6 歳	最低	64 歳	最高	87 歳

(5)協力医療機関

協力医療機関名	川崎医院、須佐病院、橋本病院、和歌浦中央病院、青木整形外科、川崎歯科医院、上山外科病院
---------	---

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

同一法人が運営する特別養護老人ホームと同一敷地内にあるグループホームである。ホームの周辺にはハウス栽培を行っている農家が多く日ごろから農家の方々とは親しくしている。働きかけにより地域との交流は少しずつではあるが深まってきている。言葉によるコミュニケーションが困難になったり身体機能が低下している入居者が多いが、入居者がその人らしい暮らしを送るには何が必要かを、全職員で日々模索している。介護記録も細かく記載されており、その人の一日の生活がすぐに把握できるように工夫されている。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	前回の外部評価の改善課題から、食事については職員と入居者が共に同じ食事をとれるように改善された。地域との交流や市町村との連携は管理者が交代したこともあり、まだ十分に改善はできていない。間口が狭く車いす対応が難しい共用トイレなど建物の構造上すぐには改善が難しいところもあるが、職員全員が改善課題を把握し必要性を感じて取り組んでいる。
	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
重点項目	自己評価は、全職員が役割を分担し記載したものを持ち寄り、みんなで話し合って作成している。新しい職員にはやや難しい面もあったが、ケアを見つめ直すいい機会になっている。
	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4,5,6)
重点項目	会議は招集しているがメンバーがそろわず、こしばらく開催されていない。過去の議事録では民生委員、家族の代表などの参加がみられ、ホームの取り組みを地域に発信する内容が中心となっている。
	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7,8)
重点項目	家族からの意見は、主に電話での聞き取りが中心となっている。ホームからは毎月文書で入居者の状態をお知らせしている。年に2回、週末に開催される家族会はほとんどの家族が参加するため意見を聞く良い機会となり、サービスに反映できるよう取り組んでいる。
	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
重点項目	ホームの近くに住む住民や農家の方々とは交流があるが、地域住民が気軽にホームを訪れる機会は少ない。ホームを特別養護老人ホームの一部と誤っている住民も多く、ホーム単独での、自治会や地域住民との交流はあまりできていないが、法人全体で「ふれあい」の取り組みを行い、地域の子供会や住民との交流を行っている。

2. 評価結果(詳細)

(☐ 部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	ホームの玄関に大きな文字で見やすく、一人ひとりの過去を尊重し、個々に合ったケアを行い、地域との交流を保つという地域密着型サービスの理念が掲げられている。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	毎朝10時頃に行われる申し送りの際に、みんなで理念を唱和している。職員も理念の必要性は理解しているが、具体的な内容の認識が十分でない面も見られる。。	○	理念を一言一句間違えずに正しく言えるかどうかではなく、地域密着型サービスとして大切な「その人らしく暮らす」、「地域との交流」などを意味する言葉がすぐに聞けることを期待する。
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	地域の文化祭や小学校の運動会に参加をしている。今年からホームの近くのゴミ集めを行うことも企画している。ホームの近くの農家の方々とは交流があるが、まだ十分に地域に溶け込んでいるとは言い難い。	○	自治会への働きかけなどをきっかけに、より多くの交流が深まることを期待する。
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	新しい職員には少し難しい面もあったが、職員全員で評価に取り組んでいる。自己評価は職員全員が役割分担し、それを持ち寄り全員で話し合い作成した。外部評価をもとに、積極的に改善に取り組んでいる。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議は管理者が交代するまでは2カ月に1回開催できていたが、現在は開催されていない。会議には民生委員や家族の代表は参加しているが、市役所や地域包括支援センターの職員の欠席が多い。	○	ホームの運営には市の担当者や地域包括支援センターの職員の意見を取り入れていくことも重要である。参加しやすい開催日時などを検討し、定期的な会議の開催を運営に反映できるように活用していくことが望まれる。

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	現在、市町村とは介護認定の申請など事務手続きでは関わりがあるが、サービスの向上に向けた十分な意見交換はなされていない。	○	ホームだけでは解決困難な問題や地域での取り組みなど、積極的に市の担当者に働きかけ、サービスの質の向上に努めることを期待する。
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	毎月、入居者の家族宛に文書で、日頃の状態を報告するとともに、状態が変化した場合は電話にて連絡をしている。不定期であるが、ホームの便り「ひまわり」を発行し、イベントのお知らせなどを行っている。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年に2回家族会が開かれており、殆どどの家族が参加している。家族会のなかで家族が意見を表すことができ家族が少ないので、サービスの向上にむけて電話にて意見や要望を聞くようにしている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	法人内の異動は比較的多いが、入居者へのダメージは少ない。職員の異動は家族にも知らせるようにしている。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	月に1回、会議技術講習会を法人内で開催している。外部研修を受けた場合には、ホーム内で伝達研修を行っている。各種研修の案内は掲示するなどして職員に知らせ、職員から要望のあった研修は内容により業務扱いにしている。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	母体の法人が運営している別のグループホームや他のグループホームと相互研修の機会を持ち、積極的に意見交換などを行っている。		

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	地区の民生委員からの紹介で利用になる場合がほとんどでホームになじみのない入居者が多いため、十分な体験期間を設けて入居者の不安が少なくなるように配慮している。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	職員は入居者を人生の先輩ととらえ、知らないことは教えてもらう姿勢で接している。地域の風習や歴史的なことなどの知識も教えてもらうことが多い。料理の苦手な若い職員が、入居者の指導で上達し、自信を持てたこともある。		
.その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者の過去の職業など生活歴を大事にし、その人らしい暮らしが送れるようなケアを心がけている。意志疎通が困難な入居者も多いが、その人の表情から気持ちを汲み取るように努めている。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	センター方式も一部取り入れ、時間ごとに記録を取っている。体温や血圧の測定だけでなく、その時刻にどのような発言や行動が見られたかを24時間記録し、それをもとに職員全員でその人に合った介護計画を作成している。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	モニタリングは1カ月ごとに行ない、介護計画の見直しは3カ月ごとに行っている。状態に変化が見られた場合は、その都度計画の見直しを行い、新たな介護計画を立てている。計画は漠然としたものではなく、ケアのポイントが詳細に記載されている。		

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援(事業所及び法人関連事業の多機能性の活用)					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	法人が企画している「ふれあい」の活動で、地域の人たちを招き入居者とともにお茶を飲んだり、お菓子を作ったりしている。併設のデイサービスでのイベント、たとえばカルタ取りなどにはホームの入居者も参加している。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域支援との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は本人や家族の希望する医療機関を利用してもらっている。受診はできるだけ家族にお願いしているが、家族では対応できない場合は、受診を支援している。ホームの協力医療機関に往診を依頼することもある。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	ホームとしては重度化した場合や終末期でも、希望があれば対応したいと考えているが、現在の職員体制では夜間など対応が難しい面もある。現在の入居者は、重度化した場合は併設の施設を希望している。		
. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1) 一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	入居者の声かけは原則として名字を呼ぶようにしている。トイレへの声かけは、耳元で小さな声で行うなど自尊心を傷つけないように気をつけている。居室へ入る際にも、例え不在であっても事前に声をかけ、入室の許可をもらうようにしている。個人の記録は鍵のかかるロッカーに保管している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事や入浴などはホームで大体の時間は決めているが、それを押しつけることはなく、入居者の希望に沿うように努めている。		

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2)その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は入居者と職員が同じものを一緒に食べている。以前は調理や後片付けと一緒にできる入居者がいたが、現在ではほとんどの方ができないため、少しでもできることを模索中である。食事中は笑顔も見られ楽しく食事ができている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	入浴は週に3～4回できるようにし、できるだけ本人の希望する時間帯に入れるように支援しているが、職員2人で入浴介助することも多く、夜間は難しいところもある。ホームの風呂だけでなく、併設の特養の変わり湯での入浴を楽しんでもらうこともある。		
(3)その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	編み物や縫物が得意な入居者には、ホームで使う小物を作ってもらうことがある。洗濯物をたたんだり、掃除もその人の能力に合わせてお願いしている。以前家庭菜園をしていた畑が駐車場になり、現在はプランターなどを利用して野菜作りをしている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	状態の悪い方が多く、全員での外出は難しくなっているが、少人数での外出は行っている。買い物や外食が多いが、近くの遊歩道で散歩を楽しむこともある。近隣からカラオケに招待されることもあり参加している。		
(4)安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	日中玄関は鍵はかけておらず、センサーも設置していない。勝手口は、リビングからは死角になり、近くに川もあり危険なため、やむを得ず施錠している。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	母体法人が運営する同敷地内の特別養護老人ホームが災害時の避難所になっているため、避難経路は確保できている。法人全体として避難訓練や救急法の講習は受けているが、ホーム単独では行っていない。備蓄も用意していない。	○	同敷地内の特別養護老人ホームが避難所になっているとはいえ、非常時にはホーム単独での対応も考慮しておきたい。備蓄の準備とともに、地域住民との交流の機会を持ち、支援を受けられるような体制作りを期待する。

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○ 栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事は栄養士のアドバイスを取り入れながらホーム独自でメニューを作成し調理している。水分量は一日1500～2000ccの水分が摂れるように気をつけている。水分量は食事時やおやつの時間に確認しているが、飲みたい時には自分で飲めるように台所にお茶を用意している。夜間には就寝前に水分補給を行っている		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○ 居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングが広いので、飾りものを置くなど生活感が出るように工夫をし、ソファや手製の椅子などを置き、くつろげるスペースを作っている。生花を飾りたいが、ちぎってしまったり、口に入れることがあり観葉植物だけを置いている。トイレは車いすの利用者には間口が狭く改善が必要である。	○	入居者の身体機能の低下のため、トイレは車いすでも利用できるトイレが必要である。現在のトイレは間口が狭く、車いす利用の入居者への対応は難しくなっている。トイレの仕切り板の位置を調整したり、ドアの位置を変えるなどの対応を期待する。
30	83	○ 居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室にはクローゼットと洗面台が設置されている。入居者はそれまで使い慣れた人形やソファを持ち込み、落ち着けるような空間を作り方を支援している。		